

民俗資料館だより

March 31st, 2015

KAMO CITY MUSEUM OF HISTORY NEWS No. 22

加茂市民俗資料館

館報 第22号

平成27年3月31日発行

編集・発行

加茂市民俗資料館

お子さん、お孫さんと いらっしゃいませんか？

当民俗資料館には、毎年3学期を中心に市内各小学校の児童の皆さんが、大勢見学に来られます。その際に、大人気なのが以下の2点の品物です。



「これは、何でしょう。」「電話。」「そう、今の電話と違う所ある？」「ボタンやダイヤルがないよ。」

こんな問答から解説を始め、昔は、交換手さんがいて電話を繋いでくれたこと、電話を設置することや電話料金が大変高価だったことを説明します。

「このプロペラのおばけみたいなものは、何でしょう。」「分からない。」「扇風機。」「これは、風散機と言ってね。」と解説を始めます。



現在のコンバインのかなり前に「唐箕（とうみ）」という籾（もみ）とごみを分ける選別機があり、その唐箕の中に風散機の小さいものが入っていることを説明します。すると子どもたちは、自由見学の時間に喜んで競って回します。

こういった民具に直接触れたり、調べたりするうちに子どもたちは、先人の工夫や知恵、様々な仕事の大変さや苦勞を学んでいきます。そして、現在の豊かさに感謝したり、郷土に愛着を持つ心を育てたりしていきます。

お父さん、お母さん、おじい様、おばあ様、どうぞ当資料館にお子さん、お孫さんと来てください。そして上記のような民具を通し、語らいのひと時を持たれてはいかがでしょうか。心が通う、有意義な時間が待っております。

森田千庵の京都遊学 —蘭方医の誕生—

加茂市文化財調査審議会委員

関 正 平

はじめに

加茂町医師森田甫三ほさん ししの嗣子森田千庵せんあん（1798～1857）は、24歳の春、文政4年（1821）京都に上り、蘭方医藤林普山ふざんの塾に入門した。千庵の京都滞在は約1年2か月余りであったが、当時、日本の中でも蘭学らんがくの先進地であった京都で学んだ蘭語と医学の知識はその後の千庵に大きな影響を与えた。ここでは、やがて蘭方の薬学に傾倒していくなか、若い千庵の京都での蘭方医学の修学を紹介したい。

藤林普山塾へ入門

藤林普山（1781～1836）は、京都に近い山城国綴喜郡普賢寺村（京田辺市）に生まれ、16歳で京都に出て医学を学んだという。のちに稲村三伯いなむらきんぼく うながみづい（海上隋鷗おう）の蘭語辞典『波留麻和解』はるまわけを入手して独学10年ののち26歳の文化3年（1806）に三伯に師事した。普山は、文化7年（1810）に3万語を収載した和蘭辞典『訳鍵』やっけんを刊行している。

千庵がどうして普山に入門したかの背景には、父親の甫三が文政3年以前から普山との知己を持ち、通信質疑の方法で自分の患者の容態を知らせ、普山から処方を得ていた付き合いがあった。このことから千庵に西洋医学を学ばせたいとの強い意志があったためともみられる。

まだ入門していない文政3年（1820）5月6日付けの藤林普山から甫三宛ての書簡に「御令息最早出府候哉如何承度奉存候、未出府も無御座候ハ、乍憚宜敷頼上候」^①と普山は千庵の上京を促していた。

千庵が京都藤林普山の塾に入門したのは、翌4年4月のことである。京都に到着した千庵は、父甫三宛ての書簡に、「当月（4月）8日京着仕り」^②と、北陸路を経て到着したことを知らせている。

「解屍篇奇聞」の書き留め

入門した千庵は、藤林普山から早速、人体全体についての講義があった。普山自身、人体解剖は稲村塾で、同門であった小森桃塙が行った解剖を文化9年(1812)12月27日に一門で参観した経験を持っていた。普山自身は『解屍篇』を著わしているが、その成立は千庵入門の頃とみられる。

表 森田千庵の「解屍篇奇聞」6冊と学習内容 文政4年(1821)記載

表紙	記載期日	学習内容
「解屍篇奇聞 天a」	念一日	オランダの事、解屍篇概要
	念二日	解屍篇概要
	念三日	解屍篇概要
	念四日	解屍篇概要
	念五日	解屍篇概要
「解屍篇奇聞 地b」	念七日	解屍篇概要
	念八日	解屍篇概要
	四月朔	解屍篇概要
	四月二日	解屍篇概要
	初夏三日	解屍篇概要
	六日	解屍篇概要
「解屍篇奇聞 玄c」	四月八日	千庵の京都市着の日(文政4年)、眼目篇
	十日	耳篇
	十一日	鼻篇
	十二日	舌篇・胸并肋腹篇
	十三日	横隔膜・肺編
	十七日	心篇
「解屍篇奇聞 黄d」	二十日	門脈篇
	二十一日	腹篇
	(23・24・25日休)	腹胃篇
	廿七日	厚腸胃薄腸
	廿八日	大機里爾・脾篇
	廿九日	肝胆篇
	晦日	膀胱篇
	五月朔日	陰器篇
「解屍篇奇聞 宇e」	五月三日	貼紙に「解屍篇五」、子宮
	五月八日	血ノ運行
	五月九日	筋篇
	五月十日	骨筋篇
	五月十一日	属胸背骨
五月十三日	腰骨	
「文政辛巳季夏十六日 我累徳児」	六月十六日	「歌累都(コウルーツ)篇」

千庵が普山から講義を受けた学習記録であるノートが「解屍篇奇聞」として、天・地・玄・黄・宇の5冊にまとめられ、付属書とも6冊が残っている(表)(3)。

各冊子には講義を受けた日付と講義内容がそれぞれ書かれている。ノートには千庵の独自の漢字表記があり、消込の■や語句をつなぐ線が引かれるなど難解であるが、記載期日と学習内容は表の通りである。

記載日付をみると、「解屍篇奇聞天」から「解屍篇奇聞地」が「念一日」～「念八日」、「四月朔日」～「四月七日」で、「解屍篇奇聞玄」以降が四月八日以降、すなわち千庵の入門日以降の日付となっており、付属

書を含め「六月十六日」で解屍篇奇聞が終わっている。

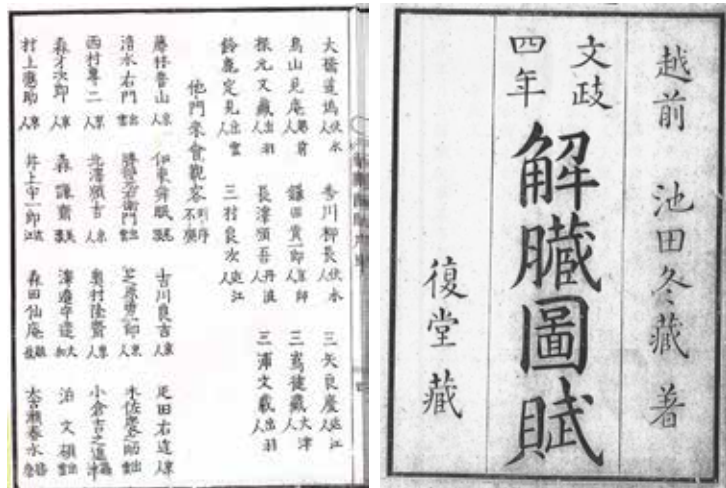
「念」は二十を表わすことから、書き始めたのは三月二十一日からだったかも知れない。と考えると、入門前の千庵のもとにあらかじめ普山が自身の『解屍篇』を送っていて、これを千庵が自ら予習をし始めた日付とも受け取れる。

蘭語の習熟

千庵は入門にあたり、「和蘭薬鏡」(9匁)・「和蘭語法解」(12匁)・「訳鍵」(3分2朱)など参考書を購入して、蘭語の習得のため用意していた。またこの後も購入したい書籍に「内科撰用」(宇田川玄随訳著)・「ハルマ写本」(12冊)などを上げ、父甫三あてに送っている。師の普山は、入門した年の9月21日付けで甫三宛てに「御令息儀も随分気丈、其上追々出精、彼横文字も余程読出申候御安心可被下候」(4)と、蘭語の翻訳が進んでいることを知らせている。

解剖の参観

入門した文政4年の暮れ12月16日、稲村塾で普山と同門であった小森桃塙が一門の塾生や他塾の医学生を集めて京都・西刑場で行った人体解剖に、千庵は師の普山とともにこれを参観している。このことは桃塙の門弟であった池田冬蔵が著した『文政四年解屍図賦』(5)に掲載されている。当時、越後人の中でも解剖を見た人はいなく、加茂の森田千庵が恐らく初めてであったとみられる。



千庵の名(左端3段目)が載る『解屍図賦』

翌5年に入ると千庵の蘭語への熱意も高くなって、師の普山は3月4日付けの書簡に「御令郎バタバ局方と申もの手ニ入れ申し候、尤も新書ニて面白く存じ候」(6)と、千庵がオランダの薬局方である「バタバ局方」の新本を入手してその翻訳に燃えていたことを

館外活動

① 古文書講座

開催時間 午後7時～8時40分

会場 加茂市公民館第1研修室

第1回

平成26年9月2日(火)

講師 関 正平 先生

(加茂市文化財調査審議会委員)

テーマ

「安政四年の長瀬神社神輿の到着について」

一般参加者 34名

講座内容

氏子から新しい神輿の再造発議が出された。大坂で作られた神輿が新潟に到着し、加茂まで輸送するやり取りを解説した。世話方は、上条新町の有力商人15人が名を連ねていた。

第2回

平成26年9月9日(火)

講師 佐藤 賢次 先生

(加茂市文化財調査審議会委員)

テーマ

「御所納之在々ヨリ納并覚書」

一般参加者 28名

講座内容

新発田藩における延宝4年(1676)頃の上納は、新発田三組、山通り、嶋通り、中之島組で負担していた。年貢米の他にも、小物成・小役といった税も課せられており、「納并覚」が残されている。その項目の解説を進めた。

第3回

平成26年9月16日(火)

講師 溝口 敏磨 先生

(加茂市文化財調査審議会委員長)

テーマ

『加茂と上条の市場争い』和解證文

一般参加者 35名

講座内容

江戸時代、加茂町と上条町が市場の開催等の件でもめ事が起き、奉行所に調停を願い出た。その後、双方で話し合い、境界や開催日を守ることを約束し、それを文書に残し、奉行所に提出した。

甫三に伝えている。局方とは薬物の品質を基準する公定書のことである。従来日本で訳されていたものより数段内容が新しく、普山塾では千庵がこの翻訳に携わっていた。

千庵が手に入れた「^(ばたあびあきよくほう)跋太亜盼垂局方」(Bataafsche apotheek)は、現在九州大学に「Sennan」の署名入りで保存されている。

京都遊学の終わり

やがて京都での修学を終えようとしていた6月11日付けの父甫三宛ての千庵の書簡に「拙者事も翻訳は先ツ文法語脈之大意を得、局方随分心易く相分り候間、一先ツ帰国仕度ニ付、古金屋同道ニ而帰郷可仕候」⁽⁷⁾と、翻訳の方法もバタバア局方のことも随分わかってきたことを記して、京都に商用で来ていた加茂の古金屋甚五右衛門と同道して帰郷する予定を父に知らせている。普山からも甫三宛てに6月25日付けで「昨年来学業無怠間御勤ニて存外御上達ニ而、拙者ニおいても大慶之至リニ存じ候、それに就き今般御双親様御見舞旁々一度中下り致したくとの事ニ御座候」⁽⁸⁾と、蘭語修学を一区切りして、加茂の両親のためにも帰郷することを知らせている。

千庵は京都では同門の伊藤圭介^{けいすけ}や新宮涼庭^{りょうてい}など新進気鋭の蘭学者との交友もあった。なかでも明治に理学博士で地衣類の権威となる伊藤圭介は千庵と同じ年に入塾した塾生であった。

江戸遊学へ

千庵が京都から加茂に帰郷したのは8月頃とみられる。しかし、一年も経たない翌6年4月27日に、千庵は、今度は江戸に向けて旅立った。江戸では蘭学者^{うだがわけんしん}宇田川玄真・^{ようあん}榕庵の塾に入門した。ここでは塾で学ぶ傍ら、榕庵^{ようお}や吉雄忠次郎・戸塚静海^{せいかい}(亮齋^{りょうさい})などと親交を結び、とくに藤井芳亭^{ほうてい}・渋谷淡齋^{たんさい}などと毎月18日を会合日と定めて、蘭語の翻訳研究を行い研鑽^{けんさん}を積んだ。この頃、千庵は26歳であった。江戸遊学は、こののち文政8年(1825)にも赴いている。

注(1). (2). (4). (6). (7). (8) : 青山学院大学図書館所蔵、(3) : 新町 養徳文庫所蔵、(5) : 京都大学図書館所蔵

第4回

平成26年9月24日（水）

講師 長谷川 昭一 先生

（加茂市文化財調査審議会副委員長）

テーマ

「校歌制定に係る書簡・日誌」

（加茂農林、加茂高・加茂小初代）

一般参加者 28名

講座内容

学校には校歌があり、当たり前のように歌い継がれているが、それぞれの校歌が制定される過程には、興味深い事実がある。加茂市内の小・中・高の学校の校歌一覧表を提示して、制定時の校名、制定年、認可日（発表会月日）、作詞・作曲者名、制定の動機等を明らかにした。



長谷川 昭一 先生

第5回

平成26年9月30日（火）

講師 丸山 朝雄 先生

（加茂市文化財調査審議会委員）

テーマ

「従 公儀御触書写」

—前須田名主 捧家文書より—

一般参加者 27名



丸山 朝雄 先生

講座内容

幕府や藩からの文書は、大庄屋から順序に従って名主に回された。それを受けた名主は、書写して次の名主に引き継いだ。その当時の大庄屋・坂井家から名主の捧家に回され、それを書き写した文書の一部を教材とした。

② 歴史講演会

日時 平成26年11月8日（土）

午後2時～4時

会場 加茂市公民館第1研修室

講師 佐藤 賢次 先生

（加茂市文化財調査審議会委員）

テーマ 「新発田藩の草高とその推移」

—加茂地方を中心に—

一般参加者 35名

講座内容

新発田藩の草高の推移は、慶長3年（約7万2千石）→元禄時代（約9万石）→延享の地改め（約10万石）→寛政元年の村替え（2万石減らされたが、約9万石）、算出方式がおかしいと幕府に指摘され、天保4年の高直しで13万石に改定。では、何故このような変遷があったかを以下のように講演した。

講演内容

新発田藩では、当初から年貢物成を村高と切り離して田畑とも反別物成斗代で定納高を決めてきた。それは初代藩主秀勝が大名となった北国筋の年貢收取の方法であり、越後に移って上杉氏遺領を受け取ったときの越後の伝統的收取法でもあった。そのため検地は打出し面積をどれだけ多く出すかが問題で、生産高を石盛り、石盛された村高に対して年貢收取率を乗じて物成高を決める收取法を採用他の大名領とは異なる土地制度・検地仕法を採用に至った。

『国史大辞典』（吉川弘文館）の「草高」（村高）の項で、佐藤常雄氏は「村高」を「年貢定納高」と誤って説明しているが、「村高」と「分米高」（定納高）を厳密に峻別して考察しなければならない。

寛保・延享年間には享保・元文期のような大水害もなく、新発田藩財政は一時的に好転し、享保4年（1719）以降30年近く継続された借知はこの時期停止された。『新発田市史』や『新潟県史』ではこの時期の財政好転の理由を大規模な水損がな



佐藤 賢次 先生

かったことをあげているが、この時期の財政基盤を築いたのは、溝口内匠一窪田与左衛門らによって進められた元文・寛保年間の「新趣法」の効果、とりわけ寛保の地改めによって、それまでの定納高（5万2千3百石余）の2割5分増にあたる1万3千5百石余の増年貢を得たことにあったと言わねばならない。

③特別歴史講演会

日時 平成27年3月7日（土）

午後2時～4時20分

会場 加茂文化会館小ホール

講師 羽二生 寛興 先生

（加茂市史編集員）

テーマ「加茂市の仏像彫刻について」

一般参加者 72名

講演内容

I 「仏像彫刻とは」

(1)文化財としての仏像の名称

（木か銅製）造、次に（阿弥陀如来・聖観音など）尊名、そして（立・坐・半跏など）姿でできている。例えば、八幡の西光寺（以下敬称略）なら、木造阿弥陀如来立像という。

(2)木彫りの用材

平安時代から檜が最適とされている。加茂市内の仏像のほとんども、檜でできているが、杉やカツラ、ヒバでできているものもあり、県内と同様に東北風である。

(3)木造物の主な造法

一木造は、頭部と体部とを一木から彫り出す技法。寄木造は、主要部を二材以上の木を用いて造る技法。座像で、脚部が別材でも、頭体幹部が一材ならば、一木造という。

(4)如来と菩薩の定義

如来は、真理を悟り、最高の境地に達したもの。

覚者の意味で、仏・仏陀と同格。菩薩は、将来仏となるべく悟りを求め、衆生の救済のため修行するもの。

II 「加茂市の主な仏像・神像の紹介」

(1)平安～鎌倉時代の作品

松坂町・大昌寺、木造聖観音菩薩坐像。後須田・地蔵院、木造大日如来坐像。若宮町・雙璧寺、木造伝元三大師坐像と木造二天王立像。八幡・西光寺、木造阿弥陀如来立像。元狭口・金泉寺、木造薬師如来坐像。五番町・耕泰寺、木造釈迦如来坐像。

(2)室町時代の作品

下土倉・谷泉寺、銅造阿弥陀如来立像。長谷・慈眼寺、木造童子立像。秋房・浅見氏、木造男神女神坐像。下高柳・日吉神社、木造男神女神坐像・猿神像。中村・光徳寺、木造大日如来坐像。岡ノ町・個人蔵、木造聖徳太子立像。

(3)江戸時代の作品

福島集会所、木造虚空蔵菩薩坐像。鶴森・薬王寺、木造毘沙門天立像。下高柳・善興寺、木造地蔵菩薩立像。上町・廣圓寺、木造阿弥陀如来立像。上下条・法音寺、木造金剛力士立像。上下条・男山八幡宮、木造雨宝童子立像。上興屋向・稻荷神社、木造役行者像。



羽二生 寛興 先生

III 「おわりに」

先達に学びながら、「Vernacular（その土地固有）の文化こそ真の文化」だから、その地域に伝えられた文化財を大切にしてほしい。そのために文化財の保護対象を拡大すべきだ。また、信仰の対象と文化財の保護（活用）を両立できることが望ましい。

平成26年度の歩み

1 入館者数

平成26年4月～平成27年3月

	市内	市外	計	団体
大人	213	773	986	3
小中学生	341	120	461	9
計	554	893	1,447	12

2 資料収集の状況

本年度は4名の方から計9件のご寄贈を賜り、お礼申し上げます。紹介させていただきます。

〈寄贈品名〉

珠洲焼、須恵器、寒倉講の儀式用具一式、縄文土器、石器、土師器、砥石、米選機、提灯

〈寄贈者ご芳名〉

池野 芳男様 古沢 征支様 有本 肇様
本間 正様

3 レファレンス・サービス及びアンケート調査

(民俗資料館への問合せ)

①レファレンス・サービス (64件)

- ・川船河遺跡の出土品について知りたい。
- ・三条市保内地域の描いてある古地図はあるか。
- ・加茂川大水害の写真展が開催される時は、教えてほしい。洪水の写真集は、出版されているか。
- ・中沢遺跡と地震痕跡の関係を教えてほしい。
- ・風合羽、雨合羽の生地の写真を撮らせてほしい。
- ・加茂郷土誌25号の古川信三著、「北海道開拓に雄飛した田下禎信翁」のコピーがほしい。
- ・こたつ、湯たんぽ、カイロ、あんかはそれぞれいくつ收藏されているか知りたい。
- ・加茂出身の井上きみまろの資料があればほしい。
- ・もみじ谷に昭和45年に橋が架けられたようだが、そのきっかけが知りたい。
- ・加茂紙は、どこで購入できるのか。
- ・我が家から古文書が出てきたが、どのような価値があるのか教えてほしい。
- ・收藏されている木製のプロペラの溝の深さを測らせてほしい。
- ・加茂市の名前の由来や市内のお勧めの場所を教えてください。
- ・黒水にある山崎家についてくわしく知りたい。
- ・加茂山公園の歴史や飼育されていた動物のことが知りたい。
- ・古い桐箆ががあれば、取材をし、番組用に撮影させてほしい。
- ・加茂川の鮭の遡上について知りたい。

②来館者の声

- ・近藤キクさんの行列の人形が特によくできていて、行列の様子がよく分かり、素晴らしいと思った。
- ・古墳や昔のお金があり、昔の人になったような気がした。
- ・リアルで、触れるのがよかった。
- ・写真の展示に、できたら年月日や現在とでも表示があった方がいいと思った。
- ・埼玉県から来たので、関東とは違った生活感が感じられ、よかった。
- ・時間がなかったので、次回ゆっくり見学したい。わざわざ電燈や暖房をつけてもらい、うれしかった。
- ・いろんな資料があり、とても楽しめた。また公園に来たら、ここにも寄りたい。
- ・天狗が大きくて迫力があり、写真も撮れて楽しかった。
- ・修学旅行の時、機織りをしたことがあったから、懐かしい感じがして、よかった。
- ・今、学校で歴史の勉強をしているから、いろいろなものに親しみを持った。

4 博物館実習

- ・9月1日～9月9日 新潟大学人文学部
学生3名

平成27年度の事業予定

○昔の加茂を映像で振り返る会

日時 平成27年8月16日(日)

午後2時～3時30分

会場 加茂市立図書館 視聴覚室

内容 未定

○古文書講座

第1回 9月 2日(水) 関 正平 先生

第2回 9月 8日(火) 長谷川 昭一 先生

第3回 9月15日(火) 佐藤 賢次 先生

第4回 9月24日(木) 溝口 敏麿 先生

第5回 9月29日(火) 丸山 朝雄 先生

午後7時～8時40分

会場 加茂市公民館 第1研修室

内容 未定

○歴史講演会

日時 平成27年11月7日(土)

午後2時～4時

会場 加茂市公民館 第1研修室

講師 丸山 朝雄 先生

○特別歴史講演会

日時、講師ともに未定

平成26年遺跡発掘調査について

本年の遺跡調査は、開発事業に関連した確認調査が2遺跡を対象に行われた。

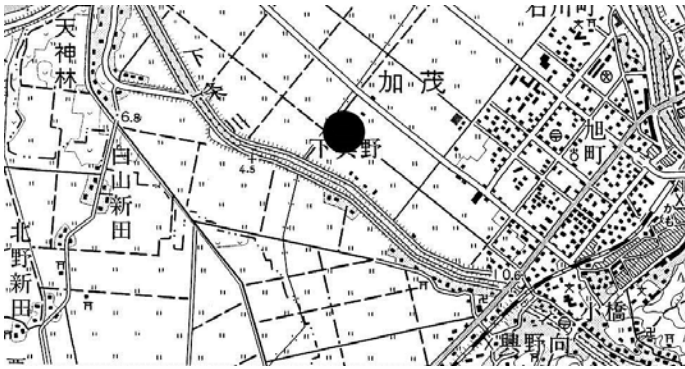
1 鬼倉遺跡—古墳・古代—

調査地 加茂市大字下条字鬼倉地内

調査期間 平成26年10月23日・平成27年1月8日
～9日

調査原因 排水路改良事業

調査の概要 19か所にトレンチを設けた。19トレンチで古代の土師器小甕の破片が出土した。ほかには腐植物層の堆積が厚く、遺跡は確認できなかった。



鬼倉遺跡位置図

2 中沢遺跡—弥生・古代—

調査地 加茂市大字下条字家ノ浦地内

調査期間 平成26年9月18日

調査原因 倉庫建設工事

調査の概要 4か所にトレンチを設け確認調査を行った。周辺の確認調査の結果を参照に、VI層の暗灰色粘質土を遺物包含層、VII層の緑灰色土を遺構確認面に相当すると認識したが、遺構・遺物ともに確認できなかった。



中沢遺跡位置図



鬼倉遺跡 5トレンチ



中沢遺跡 1トレンチ



鬼倉遺跡 19トレンチ



中沢遺跡 3トレンチ

資料紹介

新通遺跡出土の弥生土器について

伊藤秀和

ここに紹介する土器は平成 10 年の発掘調査で古墳時代前期を主体とした新通遺跡から出土したもので、報告書では弥生時代中期後半の土器（報告書第 67 図 1）として報告された〔伊藤・平岡ほか 2000〕。その後、実測図の誤りや破片が接合することが明らかとなったことと加茂市では弥生時代の資料が僅少であることに鑑み、修正した図の提示を目的とし、概略を報告する。

土器は包含層から出土した。頸部～胴部にかけての接合する 3 点と底部 2 点の合計 5 点の破片がある。復元器形は胴部中ほどが膨らみ、頸部がすぼまる筒形土器である。底部は平底で、径 5.6cm である。頸部～胴部外面の 8cm の幅に不規則な直線と波状の 20 条のヘラ描き沈線文が見られる。弱くくびれる部位直下の 3 条の沈線が上下文様を区画



外面



内面

する。内面は細かいハケメによる調整痕を残す。色調は全体に黒褐色で、被熱の痕跡がある。

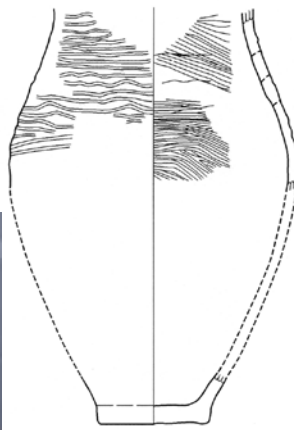
器形や外面の文様構成は福島県奥会津地方の只見川流域からの、内面のハケメ整形は信州地方の栗林式土器からの影響が指摘され、両様式が融合した土器と見られる。ほかに類例がなく、弥生時代中期後半の多様な地域間交渉の一例として注目される。

本報告では、石川日出志氏と笹澤正史氏から多大なご教示を賜った。記して御礼申し上げます。

引用・参考文献

石川日出志 2000 「南御山 2 式土器の成立と小松式土器との接触」『北越考古学』第 11 号 北越考古学研究会

伊藤秀和・平岡和夫ほか 2000 『丸湯遺跡・新通遺跡—国道 403 号線道路改良工事に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書—』加茂市教育委員会



0 (1:4) 10cm

新通遺跡出土弥生土器 S=1/4

編集後記

今回玉稿をお寄せくださいました、関正平先生に厚く感謝申し上げます。また、これまで貴重な民俗資料を寄贈してくださいました皆様に、重ねて感謝申し上げます。

加茂市民俗資料館

- 開館時間 9:00 ~ 17:00
- 休館日 月曜日、毎月第1,3,5土曜日
祝日、年末年始
※ 但し、4,5月は月曜日のみ（祝日に当たるときは次の平日）

〒959-1372 新潟県加茂市大字加茂229番地1
TEL / FAX: 0256 - 52 - 0089
E-mail: minzoku@city.kamo.niigata.jp